
彼のにおいにつつまれて。

霧想大雨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

彼のおいにつつまれて。

【Nコード】

N5495B

【作者名】

霧想大雨

【あらすじ】

『私の精神安定剤』に書き足しました。大学生の「私」と、その彼氏恭平の日常のひとこまのお話です。

彼のおいにつつまれて。

私はソファアーに寝転びながら、じつと睨んでる。キッチンのテーブルにどっかりと乗っかって、こちらを向いているVAIOの文字を。

その向こう側には普段はかけない薄い眼鏡をかけている、恭平の姿がある。寝転んだ状態だと顔は見えないけれど、彼は真剣な表情でパソコンの画面とにらめっこしているはずよ。私が起き上がれば、その真剣な表情を観察できる。

でも、見ない。

だって悔しいじゃない。あの切れ長の目が、真剣な光を宿しているのを見ると、どきどきしてきちゃうんだもの。私を見るわけじゃないのに。パソコンに嫉妬するなんて、馬鹿馬鹿しい。

だから、見ない。

聞こえてくる音は、カタカタと文字を打つ音とパソコンの起動音。そして、換気扇が回る音。

恭平も私も、大学生。

恭平が今、必死になっているのは明日提出のレポート。私は取っ替えない科目だから、みてもわからないし、ましてや教えることなんて、出来ない。

いつもなら、必殺技『コピーアンドペースト』を使っているとこるだけけど、今回はそれが出来ないみたい。曰く、全員違う課題を

彼のおいにつつまれて。

出されたらしい。教授もよくやるよね。人数分レポート読むのも重労働のはずなのに。

「ねえ、かまってよ」

そう言えば、この状況は変わるだろうか。変わるかな。……絶対変わる。もちろん、嫌な方向に。私だって、レポート中に邪魔されたら怒るからね。

恭平は、明日提出のレポート。いつ終わるのかさえわからない。

いつもなら邪魔しちや悪いと思って帰るんだけど、今日は別。そばに居たかったの。

だから、こうして静かに終わるのを待っている。

カチン、と聞こえたのは、恭平のジツポの蓋が開く音。

BLACK DEVEIL ブラックデビルー恭平愛用の、タバコの名前。タバコにしては甘ったるいにおいがする。

換気扇が回っているのは、タバコの煙にむせちゃう私がいるから。さりげない気遣いに少しだけ、嬉しくなつてにやけてる。ああ単純な私。

そういえば、私が好きになる男の人って、みんなそれぞれきれいな指をしている。

恭平だって、細くてきれいな長い指だ。タバコに絡む指に見惚れて、目で追ってみたりして。でもやっぱり、ここからじゃあ見えな

い。
ここから見えるのは、テーブル、パソコン、恭平の足。パソコンからあがってるように見える、タバコの煙。レポートが終わるまでは、間違つても恭平の顔は見ちゃいけない。きつと彼の邪魔をしてしまうから。……かまってほしくなってしまうから。

いけないいけない。ちょっとだけ、きゅんときてしまったわ。他

彼のにおいにつつまれて。

のこと、考えよう。

恭平が言うには、タバコは一分ちよつとで一本終わってしまったらしい。私はタバコというものを毛嫌いしていて、一度も吸った（飲んだって言う？）ことがないから、その時間が長いのか短いのかはわからない。そもそもどうしてタバコを毛嫌いしはじめたんだっけ？ 小学生の頃だったかな……

そんなことを思いながら、ゆらゆらと、換気扇に飲まれてゆく煙を見つめていた。

いつの間にか眠っていたみたい。髪をすかされている感覚が、気持ちよくてすり寄った。いつから頭を撫でてくれていたんだろう。恭平が少し、笑った。

「お前、ほんと猫みたいだな」

恭平は、ソファアーによりかかってあぐらをかいていた。少し低めのソファアーだから、彼の腰の高さほど。私が起き上がったら、ソファアーに座る私のほうが頭一個分高い位置にきた。この位置から恭平を見下ろすのって、なんだか新鮮だ。私はいつも、これくらいの位置から見下ろされているんだ。

「終わった？」

外はもう暗い。あれから2、3時間くらい経ったのか。

「おう。こんなもん、ヨユーだし」

恭平が言いながら体をこちら側に向ける。同時に、私は恭平の首に腕を絡め、髪に顔をうずめて目を閉じた。甘ったるいタバコのおいと、彼の香水のおいが混ざったにおい。私が好きな、恭平の

彼のおいにつつまれて。

においだ。

恭平のにおいと、ぬくもりを感じて、人恋しかった私の心は一気に満たされる。どうしてこんなに温かくなるんだろう、不思議。

恭平が私の背中に手を回して、ぽんぽんとたたきながら、

「なんか、あつた？」

って聞いたけど、

「恭平のにおいって、落ち着く」

私は心からそういった。

的外れな答えではあるけれど、こうしていると癒されている気がして、ほかのことは、もうどうでも良くなってしまっただ。

どれだけそうしてただろう。長かったような気もするし、短かかったような気もする。絡めていた腕を緩めると、恭平の輪郭が視界に入る。

「癒された？」

いつも私が言う言葉。今日は恭平に先取りされた。それがちょっとくやしなくて。ちょっとだけ、頬を膨らませた。

「まだ足りない」

突然恭平が、ソファーにすわったままだった私を引きずりおろして、膝の間に抱きこんだ。引きずりおろされた私は、びっくりしてどきどきしてる。どきどきする理由はそれだけじゃあないんだけど。目を閉じて、肩に頭を預ける。

……暖かい。背中に回された腕も、頭を撫でてくれる手も。彼のにおいに包まれて、今日初めて私は心の底から安心した気がしたんだ。

「どう？ 足りる？」

耳元で恭平がいう……わかってるくせに。

でも声がひどく優しく響いたから、今日はもっとよくばってしま

彼のにおいにつつまれて。

彼のおいにつつまれて。

おう。

「ね、キスして」

視線が絡んだのはほんの一瞬。恭平のきれいな指が、私の顎をすくう。

あなたのすべてが私を癒す、薬なの。

(後書き)

感想等ございましたら、お気軽にお願いします。
踊り出すほど感激します。

今後とも、霧雨の小説を読んただけければ光栄です。

彼のおいにつつまれて。

彼のおいにつつまれて。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5495b/>

彼のおいにつつまれて。

2009年3月11日00時30分発行